

巻頭言

臨床教育学講座の紀要『臨床教育人間学』第1号は1999年に発刊されました。その目的は、講座の教員や大学院生、卒業生の研究交流の場を生み出すこと、そしてとりわけ大学院生を含む若手研究者に研究発表の場を創ることにあります。ここ数年は、ロンドン大学教育研究所との国際交流を通じて、講座の教員や学生の英語論文を発表する場ともなってきました。本第12号(2013年版)も、当初発刊の伝統を引き継いで講座大学院生の日本語論文を掲載すると同時に、2011年12月17日に開催された「京都大学大学院教育学研究科-ロンドン大学教育研究所第五回国際会議」の発表成果である英語論文を特集として掲載しています。

2011年末から2013年初めにかけて、講座では色々な催しが行われ、業績も積まれてきました。矢野智司教授は、「教育はどのように問われるべきか—生成と発達の教育人間学再考」(『教育哲学研究』第105号、2012年、pp.47-52)、「子どもがよく遊び深く生きることを支える教育社会—『遊びの共同体』の力」(『関西教育学会年報』第36号、2012年、pp.166-170)を出版しました。西平直教授は、「臨床の知・科学の知・書物の知—ブラインドウォークの体験から」(『日本仏教教育学研究』第20号、2012年、pp.7-20)、「世代連鎖とアイデンティティ—ジェネレイショナル・サイクルの中で」(『現代と親鸞』第24号、2012年、pp.79-102)、「ブータンと「有り難い」—感謝の心と畏敬の念をつなぐもの」(『児童心理』No.946、2012年、pp.108-113)などを出版しました。また2012年9月と2013年3月には、ブータンに赴いて多くの聞き取り調査を行いました。鎌田東二教授は、『古事記ワンダーランド』(角川選書、角川学芸出版)(2012)、「身心変容技法の起源とその展開に関する試論」(『身心変容技法研究』第2号、2013年、pp.3-19)、「『こころの練り方』探究事始めその三 南方熊楠の『心理学』を中心に」(『モノ学・感覚価値研究』第7号、2013年、pp.2-12)などを出版しました。斉藤直子准教授は、ポール・スタンディッシュ教授との英語の共同編著 *Stanley Cavell and the Education of Grownups*, Paul Standish and Naoko Saito (eds.) (New York: Fordham University Press, 2012) および、*Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*, Paul Standish and Naoko Saito (eds.) (Springer, 2012) を出版しました。後者は、2008年8月に京都大学で開催された

International Network of Philosophers of Education の第11回大会での京都学派の教育思想をめぐる国際パネルの成果を書籍としてまとめたもので、矢野教授、西平教授、斉藤准教授の英語論文が掲載されています。また、講座の大学院生との数年にわたる共同研究の成果である翻訳書、ポール・スタンディッシュ著『自己を超えて: ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』(法政大学出版局 2012年) を出版しました。



西平教授のブータン調査の記録画像より

大学院生の業績としては以下が挙げられます。柄澤郁子「メルロ＝ポンティにおける自己変容の契機としての言葉」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、2013年、pp. 319-331）。山本一成「道なき道を踏みゆく—裏山の探検から生まれるファンタジー」（『発達』132号、2012年、pp. 25-32）、「主体性のジレンマを超える保育者の関わりについての省察—エドワード・リードの生態心理学概念を手がかりに」（『乳幼児教育学研究』第21号、2012年、pp. 47-56）、「プラグマティズムから捉え直す保育実践研究—現象学的記述と生態心理学的記述の保育実践における相補性を例として—」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、2013年、pp. 305-317）。福若真人「レヴィナス思想における「子ども」の意味—過去・現在・未来を貫く〈善さ〉—」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、2013年、pp. 333-345）。

特集「ロンドン大学教育研究所-京都大学大学院教育学研究科第五回国際会議」

「京都大学大学院教育学研究科-ロンドン大学教育研究所国際会議」は、グローバルCOEの支援を受けつつ、過去五回にわたりイギリスと日本で開催され、講座の教員や大学院生もこれに関わり、国際交流の一端を担ってきました。2011年12月には、ロンドン大学教育研究所と京都大学の間に大学間協定が締結されました。第五回会議のテーマは“Culture and Subjectivity in Translation”（翻訳のさなかにある文化と主観/主体性）と題され、ロンドン大学教育研究所のポール・スタンディッシュ教授に“Social Justice and the Occident”（「社会正義とオクシデント」）と題する基調講演をしていただき、同研究所のナオミ・ホジソン研究員、コーネル大学の酒井直樹教授らに応答発表をしていただきました。日本からも、京都大学および他大学の教員、研究員、大学院生が、教育哲学、文化人類学、比較教育学、教育認知心理学などの多彩な分野で発表に参加して下さり、まさに会議の主題である異文化間対話と翻訳という思想を実践すべく、国際的、学際的、世代横断的な対話の場となりました。今号の特集に収められた英語論文は、直接的、間接的にスタンディッシュ教授の基調講演に応答して会議で発表されたものの一部です。こうした対話の場は、臨床教育学、教育人間学が、まさに人間という観点から教育学を学際的に外に開く役割を果たすものであることを示すものであり、臨床教育人間学の試みそれ自体が、自己を翻し、言語を翻し、文化を翻すという広義の翻訳としての対話実践であることを示唆するものです。またこの国際会議は、2011年12月（8・9・10日）に開講されたスタンディッシュ教授による英語の集中講義「国際教育研究フロンティアC」“Culture and Subjectivity in Translation”に参加した講座学生たちの学習成果を試す機会でもありました。この授業は、高度な英語力の育成を目指し、これまで英語での議論にあまり触れたことのない学生に対しても、思想の翻訳を通じて自らの声を他者に向かって発してゆくという、きわめてチャレンジングな機会を与えるものです。授業と会議を通じて講座学生の指導にあたり、5回にわたる国際会議を通じて京都大学の学生・教員とロンドン大学教育研究所の学生・教員との交流の機会を作り、また講座からロンドン大学教育研究所に留学する学生を指導して下さっているスタンディッシュ教授に、この場を借りて御礼を申し上げます。

2013年6月17日
齊藤直子